「こころ」の学習指導

――プリントによる課題学習を中心に――

藤田美子

一、はじめに

昭和五十六年三月に大学を卒業。以来、香川県立多度津工業高等学校では六年、現在の勤務校で母校でもある香川県立観音寺第一高等学校では七年めの勤務になる。

前任校での一年め、初めて長編小説の一部としての「こころ」を授業するにあたり、長い小説を興味を持って読み通させるにはどうすればよいのか、その方法がわからず困っていた。国語科の主任の先生にご相談したところ、プリントによる課題学習で「こころ」を読み抜く方法を具体的に教えてくださった。これまでに「こころ」の授業は、前任校で三回（S56・57・60）、現在の勤務校で四回（S62・H1・2・4）の七回行っている。その間、採用教科書が変わったり、採録部分が一部変更したりで、内容読解プリントは、削ったりつけ加えたりの手直しをして現在に至っている。

今回は、プリントによる個々の課題学習を中心とした「こころ」の授業の実際をまとめさせていただいた。このプリントによる学習方法をよりよいものに高めることはできないか、また、プリント以外の別の方法で「こころ」を読み切ることはできないかという思いからである。現在の授業が抱えている問題点を明らかにし、より充実した「こころ」の授業への契機としたいと思う。

二、一年間に扱う小説及び小説関連教材

（昨年度の場合）

一学期　山月記　（中島敦）

二学期　蘭　（竹西寛子）

こころ　（夏目漱石）

三学期　〈評論〉小説とは何か　（三島由紀夫）

寒山拾得　（森鷗外）

「山月記」・「蘭」

小説の読み方を学ぶ。
「寒山拾得」
行間を読むことを学ぶ。

三、「こころ」の指導目標

1　長編小説を表現に即して、主体的に読み抜く。
2　人間について、人間の生き方について、自分の問題として考える。

四、「こころ」の指導の工夫

主体的に文章と関わらせ、表現に即した正確な読み取りを自分の言葉で書き表すことができるようにさせるために、プリントによる課題学習を中心とした指導を行う。

〈プリント〉

。感想・時・場所・登場人物とその関係・事件　（資料①）
。感想から（注1）　（資料②）
。内容読解　こころNo.1～No.4　（資料③～⑥）
　こころ〔まとめ〕　（資料⑦）
。手紙・日記・Kが自殺した原因・漱石が書きたかったこと　（資料⑧）
。「記憶して下さい。私はこんな風にして生きてきたのです。」　（資料⑨）
。手紙・日記等から　（資料⑩～⑫）

五、内容読解プリント作成上の留意点

（こころNo.1～No.4〔まとめ〕資料③～⑦）

1　プリントの枚数は、四～五枚までとする。→興味・意欲の持続
2　一枚めのプリントの問題数は、四・五問までとする。二枚めからも八問ていどとする。→興味・意欲
3　本文を引用しての問いの際、ページ・行数は示さず、場面の番号（①～⑫）で示すこととする。→全体を繰り返し読ませる。
4　幅の広い問い、狭い問い、答え方を自分の表現であるいは抜き出してというように、問いにバリエーションを持たせ、適宜一枚の問題の中に入れる。→読解力の差・意欲の差に対応

六、「こころ」の指導計画　（十四時間）

第一・二時　音読する。各自、感想・疑問を持って、それを文章表現できる。
第三時　感想・疑問点を整理する。登場人物とその関係、あらすじをまとめられる。

第四時　舞台設定・登場人物とその関係・事件について発表し、小説のアウトラインをつかむことができる。

第五時～第十二時　内容読解プリントによりながら、小説を表現に即して読み取り、その内容を自分の言葉で適切に書き表すことができる。

第十三時　手紙・日記を書くことで、Kの自殺の原因・主題について考えを深めることができる。

第十四時　主題について考え、人間について、人間の「こころ」について、生き方について、自分の問題として捉え直すことができる。

※第三時～第十二時の間に、クラスにより二、三時間の差が出ることがある。十一～十四時間ていどで終える。

七、「こころ」の指導過程

時	学習活動	指導上の留意点
1	・「こころ」の説明を聞く。 ・音読する。	・教科書引用部分の、小説全体における位置を説明する。 ・クラス全員に、出席番号順で読ませる。読みの誤りのみ訂正する。
2	・初発の感想を書く。	・第二時の初めに、この時間の終りに感想を提出することを話しておく。 ・プリント（資料①）の右側、感想欄に書くよう指示する。 時間のある者は、左側も書ける範囲で書かせる。
3	・感想の紹介を聞く。 ・舞台設定・登場人物とその関係・事件についてまとめる。	・プリント（資料②）で項目だけ示し、口頭で紹介する。 ・各自プリント（資料①）にまとめ、発表できるようにさせる。
4	・舞台設定・登場人物とその関係・事件について発表する。	・前時のプリント（資料①）メモをもとに、どの項目からでも自由に発表させ、大筋をつかませる。
5	・場面にそって小説の内容を読み取り、プリントにまとめる。	・プリント（こころNo.1～No.4〔まとめ〕）資料③～⑦に従って、各自で内容を読み取らせる。 (1)内容読解プリントが四枚あり、概ね八時間で終える予定であることを話しておく。 (2)プリントは、一枚全部をやり終えて提出し、すべての問いに○がつけば、次のプリントを渡す。 （◎うまい　○できている　△惜しい） (3)できる限り机間巡視を行い、一人で進めていきにくい者に指導・助言する。 (4)小説中の語句・設問中の語句の意味については、進度に従って、適宜、個別に、また全体に対して教える。 (5)四枚のプリントを早くやり終えた者については、こころ〔まとめ〕のプリント（資料⑦）をやらせる。 また、人物像をまとめ、漱石がこの小説を通して書きたかったこと（主題）を考えさせる。→資料としてまとめさせる。（資料⑫）
6		
7		
8		
9		
10		
11		
12		
13	・登場人物の一人にあてての手紙、登場人物の一人になっての日記（ともに「時」の設定は自由）を書き、Kの自殺の原因、主題について考える。	・手紙・日記を書くことで、主題・残された問題を浮き彫りにさせる。 ・手紙・日記・Kの自殺の原因、主題についてプリント（資料⑧）に書き、「こころ」の学習の一人ひとりのまとめとすることを話しておく。
14	・「こころ」の学習のまとめをする。 ・手紙・日記の紹介を聞く。 ・人物像等のまとめの紹介を聞く。 ・Kの自殺の原因・主題について発表する。	・プリント「記憶して下さい。私はこんな風にして生きてきたのです。」（資料⑨）に従って、内容をまとめていく。 (1)前時の提出プリント（手紙・日記）を、抜粋したプリント（資料⑩⑪）あるいは口頭で紹介する。 (2)内容読解プリントを早くやり終えた者がまとめた人物像・Kの自殺の原因・主題等（資料⑫）を紹介したり、全員に考えさせたりする。 (3)残された問題を整理・提示する。 （例：お嬢さんの気持ち、「覚悟」の内容）

八、反省と今後の課題

〈成果と考えられる点〉

(1)「同じです。」「わかりません。」は許されず、自分が主体的に文章と関わり、本気で取り組まなければならない。

(2)軌道に乗ってくると、×をつけられて腹を立てながらも、正解にたどりつこうと懸命に読み、書く姿が見られるようになる。そのような生徒は、充足感・達成感を味わい、学習後「しんどかったが印象に残る授業」という言い方をする。

(3)一人ひとりの生徒の表現をていねいに、大切にみていくことができる。生徒への理解も深まる。

(例) こころ№4 (資料⑥)

「滑る」は、私のどんな行動を表しているか。

× Kをだまして

△ Kに黙って

○ Kの気持ちを知りながらKに黙って

○ Kを出し抜いて

〈今後の課題〉

(1)感想をどのように生かしていくか。

一人ひとりの感想を授業の中で全体のものとして生かしていくことはできないか。単なる紹介に終わらず、さらに考えを深めさせていくにはどうすればよいか。

(2)プリントに取り組む意欲をいかに喚起し、持続させるか。

プリント学習の正否の鍵は、学習者の意欲にあるといっても過言ではない。また、この場合、「こころ」という小説の魅力に負うところが極めて大きい。プリントの形式・問題の質などプリントそのものに関して、個人指導と一斉指導の取り入れ方に関して工夫できないか。

(3)プリントの進度の違いから起こる不都合をどのように解消するか。

・時間のかけ方

全員が無理なく取り組める時間を確保するとともに、飽きさせず、だれさせず。

・継続への意欲

・個人への個別の助言・指導。

・それぞれの問いのポイントを明確にし、一枚のプリントの中での問いの扱いの軽重を見定めておくこと。

・口頭での質問を取り入れ、安易に、早く終えた友人に頼るのを防ぐとともに、不十分なところを補う機会を作ること。

(4)個人指導と一斉指導との組み合わせ、バランスをどのようにするべきか。

プリント学習を通して、一人ひとりの中での読みは深まっていくのだが、個人のすぐれた読解・考え・表現を全体のものとして広げていくことができないか。

(5)「こころ」の学習を終えて一斉授業の形にもどした時、互いに、ふだんのリズムを取りもどすのに時間がかかる。それが、何を意味するのか。

九、おわりに

夏の研究会で、これまでの「こころ」の授業をまとめ発表する機会に恵まれた。その折、現在の授業の改善点について、具体的に、貴重なご指導・ご助言をいただくことができた。この秋、八回めの授業を実施するにあたり、その中の一つからでも取り入れて、よりダイナミックな授業をめざしたいと思った。

今回改めたのは、次の点である。

(一)「感想と実際の授業とをより効果的に結びつけ高めるために、感想のとり方を工夫するとよい。たとえば、感想とは別に、疑問点・考えてみたいことを出させる。」

⇩一読後の感想を書く用紙とともに、「疑問点・考えてみたいこと」を書くための五枚つづりの用紙を渡した。一枚一枚に場面番号と自分の名前を書く欄を作っておき、一枚に一項目書かせることとした。どんどん書き進める子には、次の用紙を渡していった。

(二)「課題プリントの問題の構造化を図るとよい。また、提示した問題に、どの生徒から出された問題点かわかるよう名前を添えるとよい。」

⇩まず、(一)で出てきた疑問点・考えてみたいことを項目別にまとめる。次に、昨年までの課題プリントの問題と生徒から出てきたものとを比較検討し、適宜問題を差し替えた。その際、生徒から一番多く考えてみたいこととして出てきた「Kの自殺の原因と決意の時期」、それに関連して「私の心理」に迫っていける問題であるかどうかを吟味しながら取捨選択した。「襖」・「黒」の持つ意味についても、内容読解プリントの中に入れることとした。そして、問題点として取り上げた生徒の名前をプリントの中に明示した。

〈授業の実際〉

実際の授業において、これまでは、各自で課題プリントを進め添削という方法をとっていたが、今年は、四枚の内容読解プリントを、一枚につきほぼ二時間のペースで、全体で進めていくこととした。初めに全員にプリントを配り、個々に考えさせる。ポイントとなるいくつかの問いについては、全体で意見を出し合ってまとめ、脇を囲む問いについては、各人でまとめ添削するという方法をとった。そうすることによって、問題を解くスピードをはじめとする生徒の個人差に幾分対応できたように思う。一枚のプリントを構造化し

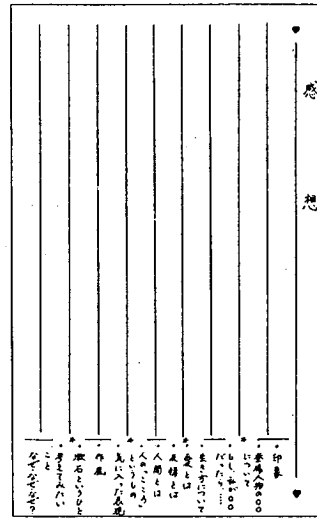
て作ることができなかったので、全体で取り上げること、また、その取り上げていく順序により、構造化を意識させたいと思った。最後にまとめとして、五枚めのプリントで「私・K・奥さん・お嬢さんの人物像」を整理し、「Kの自殺とその決意の時期」を考えた。また、「私は卑劣か。」、「お嬢さんの気持ちは私とKのどちらにあったのか。」、「漱石が書きたかったこと」についての考えを発表させて授業を終えた。所要時間数は、昨年までとほぼ同じである。

授業を終えた今思うことは、生徒が一番関心を持った「Kの自殺の原因と決意の時期」のところから切り込んで授業を展開できなかったか、ということである。内容を順を追って少しずつ正確に読み進める授業と、感動を丸ごと味わわせる授業との間で揺れながら、文学的文章においては、感動を味わわせる授業こそめざすべき道ではないかとの思いを強くしている。道のりは、まだまだ遠い。

（注1）
長編小説「こころ」（夏目漱石）の学習指導
―感想文を中心としたグループ学習―
（平野嘉久子先生）
（国語教育研究　第二十六号中
広島大学教育学部光葉会）を参考にさせていただいた。

（香川県立観音寺第一高等学校）

（資料①）



こころ

♡印象
♡私（先生）について
・人柄・性格
・死 ｛その原因 / その是非｝
・妻への告白
・もし自分が「私」の立場であったなら
・Kになぜ自分で言わなかったのか
♡Kについて
・人柄・性格
・死 ｛その原因 / その是非｝
・遺書に書かなかったのは
・「私」のお嬢さんへの愛に気づかなかったのか
・もし自分が「K」の立場であったなら
♡お嬢さんについて
・Kと私とどちらを愛していたか

感想から
・聞かされないほうがよかったか
♡明治の精神について
殉死について
♡愛か友情か
♡人間について
♡表現の特色
♡漱石について

★何回も繰り返して読むことで、今、心の中にあるぼんやりとしたものを、言葉に表現していこう。
★「こころ」の全文を読んでみよう。
★「友情」（武者小路実篤）と読み比べるのもおもしろい。

（資料②）

（資料③）

こころ　（　）無（　）者　先生（　）

No.1

① (1) 「いつもに似合わない話」とは、具体的にはどんな話か。

(2) また、「いつもに似合わない」とあることから、Kの話が、「いつも」はどのような内容であることがわかる。

② あらすじを記せ。

③ 「意味深のために」「夏に先生をされた」とは、自分の経験に照らして、たとえばどうなることか。

④ あらすじを記せ。

⑤ 「情緒に揺られてぐらぐらしましたい」とあるが、何を後悔したのか。

私はその人を常に先生と呼んでいた。だから此所でもただ先生と書くだけで本名は打ち明けない。これは世間を憚かる遠慮というよりも、その方が私に取って自然だからである。私はまた人の記憶を呼び起すごとに、すぐ先生と云いたくなる。筆を執っても心持は同じ事である。余所余所しい敬之字などはとても使う気にならない。

私が先生と知り合になったのは鎌倉である。その時私はまだ若々しい書生であった。

（夏目漱石『こころ』より）

「こころ」が大正三年に初めて刊行された漱の名作文に、「自己の心を掘へんと欲する人々に、人間の心を掘へたる此作物を愛む」とあったそうです。全文を読んで、人間の心への考えを深めてみませんか。

（資料④）

こころ　（　）組（　）番 氏名（　　）

No.2

⑤「実際的の方面」とは、具体的にはどのようなことか。

⑥「彼の平生と異なる点」とあるが、どんな点が平生と異なるのか、平生と比較して記せ。

⑦「進んでいい、進いていい」とあるが、「進む」、「進く」の内容をわかりやすく説明せよ。

進む

進く

⑧「地道試合でもする人のように」という表現には、私のどのような心情が表れているか。

⑨「彼の体質している平原の地図」は比喩表現だが、何をたとえたものか。

⑩「理想と現実の間に挟撃」とあるが、Kにとっての「理想」、「現実」とは、それぞれどのようなものであったか。

理想

現実

⑪私が、精神的に向上心のない者はばかだ」と言った裏には、どんな気持ちが隠されていたのか。

⑫「居直り強盗のごとく感ぜられた」とあるが、Kがどのように居直った（開き直った）ように感じられたのか。

⑬「もしKがその人であったなら」の「その」は、何をさすか。

（資料⑤）

こころ　（　）組（　）番 氏名（　　）

No.3

⑭⑮⑯⑰「覚悟―覚悟ならないこともない」と言ったKは、どのような意味で、「覚悟」ということばを使ったのだろうか。また、私は、Kの言った「覚悟」の意味を初めのどのように受け取ったのか。そして、それは後でどのように変化したか。

K

私

⑰「双方の点」とは、何と何とをさすか。

⑱「上野から持った魂は私にとって比較的安静な夜」であったのは、なぜか。

⑲「その時の私がもしこの驚きをもって、もう一ぺん彼の口にした覚悟の内容を公平に見出したならば、まだよかったかもしれません」という表現は、後に起こるどんなできごとの伏線になっているか。

⑳「なんにも知らないお嬢さん」とあるが、お嬢さんは何を知らなかったのか。

㉑「この二つのもの」とは、何と何か。

㉒「いつものとおり」の繰り返しは、どんな効果をあげているか。

㉓「私の自然」をわかりやすく説明せよ。

㉔「なんにも知らないK」、「なんにも知らない奥さん」とあるが、Kと奥さんは、それぞれ何を知らなかったのか。

K

奥さん

（資料⑥）

こころ

⑩「船のような板を食いました」には、私のどのような気持ちが表れているか。（　）線へ（　）番底右へ

⑪「新しい関係」を、わかりやすく説明せよ。

⑫「清る」・「右へ出る」は、それぞれ、私のどんな行動を表しているか。

清る

右へ出る

⑬私が、「おれは業縛で勝っても人間としては負けたのだ」と感じたのは、なぜか。

⑭「通りかかろうか」とは、この場合どうすることか。わかりやすく説明せよ。

⑮「またあやまったと思いました」とあるが、何に対してしまったと思ったのか。また、「また」とあるのは、なぜか。

何に対して

「また」

⑯「もう取り返しがつかないという黒い影が、私の未来を貫いて、一瞬間に私の前に横たわる金玉運をものすごく照らしました」の「黒い影」は、何を象徴した表現になっているか。また、この文と同じ意味内容の一文を文中から抜き出せ。

象徴

同じ意味の一文

⑰「私はついに私を忘れることができませんでした」は、私のどのような行動に対して述べた言葉か。

⑱「予期したようなこと」とは、どんなことか。その内容を K の遺書に一言つけ加える形で記せ。

（資料⑦）

こころ

⑲「一般」・「例外」とは、どのようなことをさすか。（　）線へ（　）番底右へ（　）〔まとめ〕

一般

例外

⑳「倫理的に弱点を持っている」の内容を説明せよ。

㉑「最後の打撃」とは何か。また、「最後の」とあるのはなぜか。具体的に説明せよ。

最後の打撃

「最後の」

㉒「機」の果たしている役割を考えてみよう。（「機」の出てくる箇所をチェックして。）

㉓「黒」のイメージをまとめてみよう。（「黒」を用いた表現を抜き出して。）

㉔比喩表現を抜き出し、それが何をたとえているのか考えてみよう。（まず五箇所ていど。）

（　　）年（　　）組（　　）番（　　）

（資料⑧）

こころ

❹ あなたから、登場人物（私・K・奥さん・お嬢さん）の一人にあてて、手紙を出して下さい。受け取り人を明記して。

❺ 登場人物（私・K・奥さん・お嬢さん）の一人になったつもりで、ある日（いつにするかは、あなたの自由）の日記を綴りなさい。

❻ K は、なぜ自殺したのだろう。そのように考えた理由も添えて。

❼ この小説で、漱石が書きたかったことは。

（資料⑨）

記憶して下さい。私はこんな風にして生きてきたのです。

一年経ってもKを忘れる事の出来なかった私の心は常に不安でした。私はこの不安を駆逐するために書物に溺れようと力めました。私は猛烈な勢をもって勉強し始めたのです。そうしてその結果を世の中に公けにする日の来るのを待ちました。けれども無理に目的を拵えて、無理にその目的の達せられる日を持つのは嘘ですから不愉快です。私はどうしても書物のなかに心を埋めていられなくなりました。私は又無組をして世の中を眺めだしたのです。

妻はそれを今日に困らないから心に強みが出るのだと観察していたようでした。妻の家にも親子二人位は坐っていてどうかこうか暮して行ける財産がある上に、私も職業を求めないで差支のない境遇にいたのですから、そう思われるのも尤もです。私も幾分かスポイルされた気味がありましょう。然し私の動かなくなった原因の主なものは、全く其所にはなかったのです。叔父に欺むかれた当時の私は、他の頼みにならない事をつくづく感じたのには相違ありませんが、他を悪く取るだけあって、自分はまだ確な気がしていました。世間はどうあろうともこの己は立派な人間だという信念が何処かにあったのです。それがKのために美事に破壊されてしまって、自分もあの叔父と同じ人間だと意識した時、私は急にふらふらしました。他に愛想を尽かした私は、自分にも愛想を尽かして動けなくなったのです。

……

酒は止めたけれども、何もする気にはなりません。仕方がないから書物を読みます。然し読めば読んだなりで、打ち遣って置きます。私は妻から何の為に勉強するのかという質問を度々受けました。私はただ苦笑していました。然し腹の底では、世の中で自分が最も信愛しているたった一人の人間すら、自分を理解していないのかと思うと、悲しかったのです。理解させる手段があるのに、理解させる勇気が出せないのだと思うと益悲しかったのです。私は寂寞でした。何処からも切り離されて世の中にたった一人住んでいるような気のした事も能くありました。

同時に私はKの死因を繰り返し繰り返し考えたのです。その当座は頭がただ恋の一字で支配されていた所為でもありましょうが、私の観察は寧ろ簡単でしかも直線的でした。Kは正しく失恋のために死んだものとすぐ極めてしまったのです。しかし段々落ち付いた気分で、同じ現象に向って見ると、そう容易くは解決が着かないように思われて来ました。現実と理想の衝突、――それでもまだ不充分でした。私は仕舞にKが私のようにたった一人で淋しくって仕方がなくなった結果、急に所決したのではなかろうかと疑がい出しました。そうして又慄としたのです。私もKの歩いた路を、Kと同じように辿っているのだという予覚が、折折風のように私の胸を横過り始めたからです。

妻はある時、男の心と女の心とはどうしてもぴたりと一つになれないものだろうかと云いました。私はただ若い時ならなれるだろうと曖昧な返事をして置きました。妻は自分の過去を振り返って眺めているようでしたが、やがて微かな溜息を洩らしました。

私の胸にはその時分から時々恐ろしい影が閃めきました。初めはそれが偶然外から襲って来るのです。私は驚ろきました。然しばらくしている中に、私の心がその物凄い閃めきに応ずるようになりました。しまいには外から来ないでも、自分の胸の底に生れた時から潜んでいるものの如くに思われ出して来たのです。

〈資料⑩〉

私はただ人間の罪というものを深く感じたのです。その感じが私をKの墓へ毎月行かせます。その感じが私に妻の母の看護をさせます。そうしてその感じが妻に優しくして遣れと私に命じます。私はその感じのために、知らない路傍の人から鞭たれたいとまで思った事もあります。こうした段階を段々経過して行くうちに、人に鞭たれるよりも、自分で自分を鞭つ可きだという気になります。私は仕方がないから、死んだ気で生きて行こうと決心しました。

私がそう決心してから今日まで何年になるでしょう。私と妻とは元の通り仲好く暮して来ました。私と妻とは決して不幸ではありません。幸福でした。然し私の有っている一点、私に取っては容易ならんこの一点が、妻には常に暗黒に見えたらしいのです。それを思うと、私は妻に対して非常に気の毒な気がします。

……

記憶して下さい。私はこんな風に生きて来たのです。始めて貴方に鎌倉で会った時も、貴方と一所に郊外を散歩した時も、私の気分に大した変りはなかったのです。私の後には何時でも黒い影が活っ付いていました。私は妻のために、命を引きずって世の中を歩いていたようなものです。貴方が卒業して国へ帰る時も同じ事でした。九月になったらまた貴方に会おうと約束した私は、嘘を吐いたのではありません。全く会う気でいたのです。秋が去って、冬が来て、その冬が尽きても、きっと会う積りでいたのです。

……

私は私の過去を善悪とともに他の参考に供する積りです。然し妻だけはたった一人の例外だと承知して下さい。私は妻には何にも知らせたくないのです。妻が己れの過去に対してもつ記憶を、なるべく純白に保存して置いて遣りたいのが私の唯一の希望なのですから、私が死んだ後でも、妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、凡てを腹の中にしまって置いて下さい。

◎「襖」の果たしている役割

◎「黒」のイメージ

◎Kは、なぜ自殺したのだろう。

◎この小説で、漱石が書きたかったこと

◎文体

手紙

○あなたは、そんなに責任を感じることはなかったのに。K以上に苦しんだのはあなたの方なのに。Kの自殺によって、あなたの未来は、暗くなってしまった。確かに、あなたは、Kの気持ちを知りながら、自分だけぬけがけをしてしまったことはひどいと思う。でも、人を好きになるのは自由だし、あなたの方が先にお嬢さんのことを好きだったのだから。Kに告白されたとき、自分の気持ちをいえばよかったね。Kが友達でなくあかの他人ならどんなにかよかったのに。そしたらあなたも楽であったのにね。

私へ…

○　Kへ

一番近くにいて、信頼していた人に裏切られた気持すごくわかります。でもあなたも、裏切ったことになると思います。何故、奥さんから、お嬢さんの結婚を聞いたとき私をせめなかった（怒らなかった）のですか。あなたは死という形で私に仕返しをしたのですか？あまりにも早い死をえらぶよりも先に、自分の気持ちをもっとみればよかったのに。頭でごちゃごちゃ考えるからよけいにわからなくなることっていっぱいあると思います。それを言葉にすれば…。

○　Kへ

あなたは最後まで鋭い自尊心を持っていたのですね。あなたの友人が、あなたのお嬢さんへの気持ちを知っていたうえで、お嬢さんとの結婚を決めたことは、鋭い自尊心を持っていたゆえにとても苦しかったことでしょう。あなたの友人も、自分がとっていた行動や態度を悩んでいたようです。なぜ、遺書に一番気になることを書かなかったんですか？そこがあなたのいい所かもしれませんが、一言友人に聞かなければいけなかったのではないでしょうか。死ぬよりも、あなたの友人と話してほしかったです。言うべきこと聞くべきことがたくさんあったのではないですか？

○　お嬢さんへ

私、お嬢さんの気持ちが全然わかりません。あなたはいったい、どちらが好きだったのですか。それともどちらとも好きじゃなかったのですか。あなたはKや私の気持ちを知らなかったのですか。もしもしっていたのなら、どうして自分の気持ちをはっきりつたえなかったのですか。私は、Kが自殺したのはあなたへのもうどうしようもない気持ちと親友に裏切られたくやしさや悲しさからだと思うけど、あなたが自分の気持ちをもっとはっきりいっていれば、いや私がこんな形で自殺することはなかったのではないかと思います。

（資料⑪）

日記

○なぜあの人（先生）は、こんなに変わってしまったのでしょうか。なぜに、ああも自分の殻に閉じこもってしまうのでしょうか…。それがすべて私に原因があるのなら、お話しになってくだされば よいのに。今日は、あの人は雑司ヶ谷のあの人（K）のお墓にもうでなさりました。あの人の心が私されにもひらかないことが私にとってとてもつらいことなのに。あの人は何もお話になって下さらない…。

○昨晩Kが自殺した。どうしてこんなことになったのか。やはり原因は私にあるのだろう。Kは私に助言を求めていたのに、私は自分のことしか考えていなかった。Kを裏切ってしまったのだ。Kを殺してしまったのだ。私の好きになった人がお嬢さんでなかったら、いや、Kの好きになった人がお嬢さんでなかったら、こんなことにはならなかったのに。今さら後悔しても仕方がないが、Kを思うと心苦しい。これから先、私はどのように生きてゆけばいいのだろう。

○今日、自分がどれほど愚かだったのか思い知らされた。この苦しい想いを一人抱いている方が良かったのか。目頃あれだけ軽蔑していたものをまさか自分が抱くとは。どうすればいいのか分からずに彼に相談にのってもらおうとした…ああまさに僕は愚かだ。馬鹿な人間だ。彼の言う通りなのだ。自ら墓穴を掘ったのだ。だがどうしようもない。自分の進む、やるべき事が分からないのだ。ただ一つ分かるのは、彼が言ってくれた「覚悟」。そう覚悟だけはある。ただそれだけなのだ。

○彼は私に秘密でお嬢さんとの結婚の話を決めていた。私は裏切られていたのだ。一番信頼している人に！。だが私は彼を責めたりはしない。いや、できないというべきかもしれない。私は精進の道にはずれた気持ちを持ってしまった。お嬢さんを好きになりさえしなければ、だれも苦しまなくてよかったはずだ。ああ、私はなんという間違いをおかしてしまったのだろう。この罪の償いは、私の死をもってわびるしかないのか。

（資料⑫）

◎ 襖の果たしている役割

Kと私とをきっぱりとわけるもの、襖を閉めた状態においても、私はKのことを想像していることからも、あるようでないようなものにも思われる。この後、二人の考えをわけてしまうようなもの。

Kそのものという感じ。

襖を開けるようになることによって、自分の心を打ちあけることになるから、二人の心のかべである。

一度自分の心を見せようとしたのにやめてしまったことを表すもの。

永久に分けられてしまった私とK。

◎ 黒のイメージ

不吉な語という感じと、Kの自殺で死ぬことから伏線と思われる。また私の将来の行く手を妨げるものであり常に私は黒い不吉なものにつきまとわれることになる。絶望感、行く手をはばむ壁（Kの黒い影）（黒い光）

どうしようと必至にもがいても、けっしてこえることのできない、自分の力ではどうしようもないものになってしまったの。又私の後悔も表しているような感じ（黒い影法師のようなK）

◎ 性格

〈私〉八方美人で、他人の前でいいかっこをしたがる。他人に自分のことを誤解されたくないと思っている平凡な弱い人間。一方において他人を思いやる心を持っているが、最終的に自分の弱さのために、結果としてあらわれない。

〈K〉果断にとんだ性格で、自分で〝こう〟と思った事に対してまっすぐに進んで行く。

遺書に私の事をかかなかったことからも、最後まで孤高で、美しく強くあろうとした。

〈奥さん〉ざっくばらんで、多少男っぽい。よく他のことが見えている。

〈お嬢さん〉明るいが、ひかえめで誰からも好かれる性格。昔の日本女性のあるべき姿といえる。

◎この小説で書きたかったこと

私という人間を通して、ごくふつうの平凡な人間が持つ心の弱さと、心の葛とう。

どのようにして、またどんな時に、人間は自分の弱さをさらけ出し、罪を犯すことになるか。また人間として独りで強いままで生きることの難かしさ。

◎Kの自殺の原因

お嬢さんへの恋が完全に絶たれたこと、出し抜かれたつらさもあるけれど、自殺によって私に、私がしたことの重大さを知らせたかった。また、Kはこのまま生きつづければ、今までの禁欲を常とする性格だけでなく今までの過去の蓄積、冷静さまでも失ってしまい、見苦しく弱い自分を私にさらけ出すことが、Kには耐えられなかった。

◎私の自殺の原因

Kの死によって自分の罪の重さを認識し、自分の人生において、どうしてもKという黒い影を背おっており、最後までそれに勝つことができないだろうと感じたから。

（生徒Mのプリントより）